

## 長渡陽一氏の博士号請求論文審査報告

長渡氏のこの博士号請求論文は、アラビア語諸方言の通時言語学的な研究である。特に口語方言祖語の音韻体系の上の方言間の不規則対応の調査である。

現在アラビア語圏の言語状況は中世ロマンス語圏の言語状況に似ている。つまり、文語と口語の間に大きな違いがある。文語というのはコーランやイスラム以前の詩などに基づく西暦九世紀以来標準化された古典アラビア語の継続である。口語の諸方言の直接の源は古典アラビア語ではなく、俗ラテン語のような「コイネ」か「クレオール」か、少なくとも文語と多少違う話し言葉であると思われる。この仮説を支持する証拠は、中世文法家による観察、古い文献と、文語にはないのにすべての方言にはある共通点の3点である。方言祖語があると思われる、比較方法で再建する作業はまだあまり進んでいない。長渡氏の論文この発展していない研究分野を進める研究であるため、先駆的な研究として評価される。

こんなような研究が可能になったということは最近である。過去四十年、アラビア語圏の各地域の辞書、文法書などの記述的な研究が増えた。このような資源を使うことで、長渡氏が初めて方言全体的を見渡すことができた。しかし、この方法には弱点もある。口語アラビア語は標準化されていない、普段書かれていない言語で、dynamic な状態を持つている。話者の移動などで方言間の接触や混雑がよく起こると指摘されていた。その問題を超えるために、比較区的安定している都会の方言(カイロ、ダマスカス、モロッコ)と、文語及び他の方言から孤立している方言(マルタ、中央アジア、ナイジェリア)に中心に合わせた。

第一段結果として、子音を再建するのは大きく問題がないが、母音を見ると方言の間に不規則対応が多くあると見うけられる。どの語派でも母音は不安で再建しにくいと思われるかもしれないが、アラビア語(もしくはセム系の言語)ではもうひとつの要因がある。この語派では語幹内の母音は子音と独立した文法の役を演じる。そのために不規則母音対応は音韻変化だけではなく類推、再分析、語彙化、文法化、など文法変化にかかわっているプロセスで成り立ったと考えるのが適当である。

最も複雑で分かり辛い部分は、基本的で最大クラスの動詞における語幹母音交替である。(基本的な動詞の母音は方言によって違うということはアラビア語諸方言の経験ある人には明らかでありながらも不思議な現象である。)古典アラビア語ではこのクラスの動詞の語幹母音はアラビア語の三つの母音のいずれも可能で、予想できない。ただし、

動詞の意味や結合価(自他性)による傾向がある。もう一つの傾向は ablaut である:動詞の現在形の語幹母音は高い母音(i,u)であれば過去形の母音-a- で、現在形の語幹母音が-a- であれば過去形の語幹母音が高い母音の-i- である傾向が強い。

長渡氏はこのような傾向が諸方言にもあるか、方言の祖語に再建できるかどうか、測定しようとした。そうするためにいくつかの方言の数百動詞の徹底な統計分析が必要であった。この現象について、初めての統計的な研究として、評価される。この研究の結果において、アラビア語圏のさまざまな地域に種々な言語変化プロセスが起こったことが明白になる。ある地域(モロッコ、イラク、など)では類推的な平坦化で、語幹母音の異変性が高い程度で削減した。ほかの地域(カイロなど)でこの異変性は語彙化や形態化されて、語幹母音の違いのみで分別された動詞のペアが出来上がった。またある地域(マルタ、など)で語幹母音異変性が一度平坦化され始めたようであるが、その後、環境によって音韻変化で再び新しく、より複雑な形で再生した。

先行研究では、ある方言についてこのようなプロセスや傾向があると暗示されたが、長渡氏の論文は広く比較的な証拠と、統計的な分析に基づき、この通時的なパターンにおける初めての徹底的な論証である。

以上、先駆的研究にありがちで、この長渡氏提出の論文は東京外国語大学博士の学位を与えるにふさわしいものとする。